



大学院生がマラウイで行ったフィールド調査にて

多彩な国際教育

プログラムで農業から

世界の課題を解決

東京農業大学／大学院

国際食料情報学部 国際農業開発学科

東京農業大学は生物系の総合大学として、農学の視点から「生命」「食料」「環境」「健康」「エネルギー」など、地球規模の課題を探究する大学だ。建学の精神「人物を畑に還す」には、農の現場や実社会の課題解決に寄与する人材を輩出する意が込められている。

国際食料情報学部国際農業開発学科は、農業・農村の開発を通じて途上国の発展に貢献する人材の育成を目指している。学生は、自然科学と社会科学の両領域からなるカリキュラムを通じて、熱帯作物の生産や自然環境保全、途上国の社会・経済理論、食料問題などを学び、農業開発の専門家としての資質を養うために、国内外での農業実習を体験していく。南米やアフリカ、東南アジア、欧米など、世界各国の大学や農業の現場で学ぶことのできる短・長期のプログラムも豊富だ。

東京農業大学大学院では長期履修制度を活用して、在学しながら国際協力機構（JICA）

寺田 順紀先生
国際食料情報学部
国際農業開発学科
助教

北アフリカ・中東を研究フィールドとしてナツメヤシの研究をしている。授業では「熱帯農業入門」など。



教えてくれた先生

（CA）青年海外協力隊へ参加できるようにしている。今後は学部にも同様の制度を導入していく方針だ。学生を送り出す一方で、JICAを通じてアフリカ諸国から多くの留学生を受け入れ、日本と途上国の双方の人材育成を通じて、世界の農の発展を支えている。

「農業を通じた国際協力を学びたい学生に来てほしい。国際協力の現場が多様化していく中で、新しい形と一緒に模索して行けたら」と寺田順紀助教は言う。